

子育て支援者の専門性の探索

— 子育て支援者の語りから —

An investigation into the Expertise of Child-rearing Supporters: An Analysis of Supporter Speech Patterns

日比野 直 子

Naoko HIBINO

【問題と目的】

わが国で子育て支援の必要性が明確な社会的認識となったのは、1990年代以降のことである。当初の子育て支援は、共働き家庭を対象とした保育施策を中心としたものであったが、家庭保育をしている専業主婦家庭もその対象に含むものとなった。それに伴い、子育て支援は、市町村の役所や保健所による市民サービスや、民生委員・児童委員を中心とした活動として広くおこなわれるようになった。これら市町村の役所や保健所による子育て支援は、子育て世帯のニーズに応じた支援情報の提供等のソーシャルワークや、子どもの発達や発育に関する医療・保健的な支援をすると共に、民生委員による地域の人々の見守りや繋ぐ働きなど、多様な専門性を総合しておこなわれてきた。

そして、2000年代からは保育所や幼稚園に対しても、在園児保護者に対する子育て支援、さらには、地域の子育て家庭への子育て支援を担う役割が加えられた。保育所・幼稚園が有する物的・人的資源、特に保育者の専門性を用いることが期待されたのである。2001年改正の児童福祉法では、保育士の業務として「児童の保育」に加え、「児童の保護者に対す

る保育に関する指導」が掲げられた。以来、文言は変わりつつも、保育所保育指針や幼稚園教育要領の改訂においても、保育士や幼稚園教諭が子育て支援を推進する役割を担うよう示されている。

このような動きに伴い、保育者養成教育においては、子育て支援に関する保育士資格の科目として保育相談支援が必修化されることとなった。これにより養成段階において一定の学びの機会は得られるようになった。しかしながら子どもの保育に関する養成教育の充実と比べると、極わずかな授業時間数にとどまっており、実習など実践的な経験を積む機会はほとんど得られない状況である。これは、子育て支援は保育の専門性の応用でこと足りるものだという認識にとどまっているためではないだろうか。

保育者の専門性をそのまま子育て支援者の専門性としてあてはめることはできないということは、すでに指摘されている（汐見, 2007; 片山, 2016など）。また、五十嵐（2008）は、保育所における子育て支援の担い手は、保育経験や生活経験の長いベテランの職員であることが多いとし、保育の専門家ではあるが、保護者支援という面での専門性や資格は

不問のままであるという現状について疑問を呈している。

また、橋本（2001）は、地域子育て支援センターにおける支援者には、保育所実施型の子育て支援事業における支援者とは異なる専門性が必要であることについて述べている。

近年、大学やNPOによる運営など子育て支援の場が多様となった。運営母体が親子をどのように理解し、どのような理念や支援内容を構想するかによって、それぞれの子育て支援現場に独自性が生まれている。また、子育て支援現場の多様化に伴い、子育て支援者に求められる専門性も多様なものとなると考えられる。とすれば専門性を一概に述べることは難しい。さらに、現在子育て支援者として働く場合、資格などは問われない。それでは不十分とし、各団体で支援者養成の講座等も開かれるようになったが、多くの子育て支援者たちは、個々の経験や信念、価値観等を背景に個々多様な支援を展開しているのが現状である。

この現状を、筆者はかならずしもマイナスとは捉えていない。むしろこのような子育て支援者の多様性は、かえって親子への支援にプラスに働くとも考えるからである。子育ては人の暮らしに密接に関係するものである。子育て支援の現場は地域社会に密接である必要がある。こう考えると、より広い経験や価値観を持つ子育て支援者の存在は、多様化する親子に対するふさわしい支援の方策を見出すために重要な意味を持つものだと思われる。

子育て支援者の歴史ははじまったばかりである。この黎明期にあって、ただひたすらに親子に向き合い支援する支援者の専門性に関わる報告を蓄積することは大変意義深いことであると考えられる。このような背景を踏まえ、本研究の目的は、子育て支援センターで働く

支援者の語りを分析し、子育て支援センターにおける子育て支援者の専門性について探索することとする。

【方法】

対象 分析対象は、2018年3月22日に行われた大学運営の子育て支援センター^{注)}における年度末振り返りでの子育て支援者（以下支援者）による語りである。

この子育て支援センターに勤務する支援者は5名である。うち元保育者が2名、現保育者1名が含まれている。当センターでの勤務年数は1年～2年である。

この年度末の振り返りのテーマは、「子育て支援者として仕事をするうえで大切にしていること、及び子育て支援者として仕事をするうえで困難と感じていること」であった。

注) 対象子育て支援センターの概要

大学の地域貢献事業の一つとして、2015年10月に大学構内に設置された。一日当たりの平均利用者数は60名であり、地域の親子が利用する施設として親しまれている。

運営は大学であり、運営委員は教員と事務職員で構成されている。支援者5名が勤務し、一日当たり3名体制で親子の支援にあたっている。

2015年の開設当初の一年間は、支援者たちの意識は、施設の円滑な運営が主眼であった。その後継続して通う親子が与えられ、利用者数も安定し施設運営が軌道にのり始めたことで、様々なケースにどう応えていくか、支援の内容や質について意識が向くようになってきた。

そのような歩みの中、年度末に支援者の支援を振り返る時が持たれた。支援者一人ひとりが日々親子と向き合う中で何に気付いていったのかを語りあった。一つの正解が見出されたわけではない。そして今も、よりふさわしい支援の在り方を求め、試行錯誤の歩みは続いている。

分析方法 振り返りでの語りを参加者の了承を得てICレコーダーを用いて録音し、全て

の支援者の語りを文字化した。また、発言内容を記述し提出された文章およびフォローアップアンケートへの記述も分析対象とした。分析にあたっては、SCAT:Steps for Coding and Theorization (大谷2008, 2011)を参照し、文字化した語りのセグメント化を行った。59セグメントに分割された語りから前掲の分析シートを用いて4ステップを踏み、構成概念を生成した。その後、支援に関する語りの内容をテーマごとに分類した後、構成概念を用いて再構成したストーリーラインを記述し、それぞれ考察を加えた。分析の観点は、支援者が保護者をどう捉えているかと、支援者自身が日々の実践の積み重ねの中で感じている子育て支援者の専門性とは何かである。これらを通して、子育て支援センターにおける子育て支援者の専門性とは何かについて探索したい。

【結果と考察】

支援に関する語りの内容は、次の4つのテーマに大別された。(1)支援の始まりとしての迎え入れ、(2)ニーズを受け取る対話、(3)繋ぐ支援・繋がりが生まれる支援、(4)子育て支援者としての自分である。以下、テーマ毎にストーリーラインを示し考察を行う。なお、〈 〉内は、構成概念であり、「 」内は実際の語りである。また、()は筆者による補足である。

(1) 支援の始まりとしての迎え入れ

ストーリーライン

親子がドアの向こうに姿が見えた時からが〈支援の開始〉である。心がけているのは親子に〈被受容感〉、〈居場所獲得感〉そして〈心地の良さ〉をもたらすことである。そのためにも〈安定した雰

囲気〉で親子を出迎え、〈視線を合わせたあいさつ〉をし、〈個別的に名前を呼ぶ〉ことを大切にしている。特に新来の保護者に対しては、〈他との繋がりの有無〉を主とした〈子育て状況に関する情報収集〉を行っている。また〈快適に過ごすために役立つ情報〉と位置づけた利用ルールの説明を行う。

受容 「初めて来られた方は2度目も来られるように、2度目に来られた方は3度目に繋がるように」と迎え入れているという。それは、すでにその弊害が指摘されている孤独な育児にこの親子が陥らないようにという強い願いが込められている。

そのために、支援者は親子の受容を最優先に行う。それは日常的に家庭で保育をしている親子にとって、社会に受容されている感覚を得ることが重要だと考えているからであろう。「(受け付けの時,) ○○ちゃん元気だった?とこちらから名前を呼び、その後どうでしたか?と声をかけるようにしています。(中略) ここには自分たちの居場所があるという安心感を持ってほしいから」と語っている。視線を合わせたり、名前を呼んだりすることを通してこの親子の存在を私たちは認めているというメッセージを送っているのである。また、特に新来者からは対話の中で特に子育ての状況に関する情報収集を行っている。家族や友人などから必要な時にサポートが受けられる状態かどうかを把握し、支援の見通しに役立てるといふ。個々の事情も含め、受容をもって支援センターに迎え入れているのである。

コミュニティを形成する一員としての保護者
新来者には、施設案内をしながら利用ルール

を説明する。その際の伝え方について「ルールに従ってもらおうというよりはルールを知ることによって、この施設を快適に使うことができる、そういう伝え方をするように心掛けています」と語っている。そもそもルールとは守らなくてはならないものとして伝達されることが多い。しかし、この支援者は、あえて親子がこのセンターを快適に利用するために役立つ情報として伝えるようにしているという。これは、保護者を一方的に支援を受ける受動的な存在ではなく、この子育て支援センターというコミュニティを形成する一員として捉えようとしているゆえであると考えられる。

(2) ニーズを受け取る見守りと対話

ストーリーライン

保護者の「今日の心の状態」や「今日のニーズの把握」は、主として「観察」や「対話」を通して行う。そこから得られた「情報」を基に「ニーズのくみ取り」をし、「より最適なタイミング」で支援するように心掛けていく。支援者は、日常的に保護者と「子育ての喜び・大変さの共感」をするなど、「共感的」に関わりをする。また今語りたいたいという「タイミングを尊重」できるよう「広場での見守り」を行っている。

保護者から直接思いを「聴く」ことで、「支援者自身の思い込み」や「観察での理解の不確かさ」に気付かされることもある。こうして行われる「親子理解の更新」はその後の「支援にも影響」を与える重要なものであると考えている。

また、「聴く」にあたっては「保護者の語ろうとする思いの尊重」を重視し、「支援者の知識経験の披露」とならないように配慮する。また「知識技術伝授の

求め」に対しても「情報提供」、「選択肢の提示」を行い「自分で方向性を見つける手助け」をするように心掛けていく。しかし、「保育者経験」からつい「教授的」になることもある。

内容によっては、「他のスタッフ」、「他の保護者」や「臨床心理士」に繋ぐこともある。また、時に保護者から「応じられない要望」が示されることもある。それに対しても「NOの即答回避」を行い、保護者が「否定された感覚を抱かない」ようにし、むしろ「要望する保護者の心情をくみ取る」支援を目指している。

多様なニーズに対する応答 「スタッフと何か話したいのか、他の人と話したいのか、（育児休業明けの職場復帰が近づく中）我が子とゆっくり過ごすために来たのか等保護者の今日のニーズはどこにあるのか（中略）考慮して関わる必要がある。」と語るように、ニーズは人によっても、日によっても、親子の状況によっても異なっているため決して画一的な対応はできないという。その多様なニーズの受け取りは、言語的、非言語的メッセージの両方を総合しおこなわれている。

また、対話の際は「（支援者が）選ぶ言葉によって、相手が自分の意図とは全く違う受け取り方をされるため、ふと何気なくかけることばにも注意深くなれるよう意識している」という。さらに、応える際には教授するのではなく、自己決定を支える支援を心がけ、親としての育ちを促す対応をしようとしている。ここからも、支援者が保護者を子育ての主体であると捉えていることがうかがえる。

今語りたいたい思いを聴く 「たとえ閉館間際の

時間であっても、(思いを)吐き出し始める(保護者がいらっしやったら)、その思いは丁寧(すくい取りたい)とし、保護者自身が話したいと思うタイミングを尊重すべきだと語っている。ニーズを受け取るためには、ここで話したいと思う保護者の思いとそれにしっかりと耳を傾け聴こうとする支援者の双方の条件がタイミングよく整う必要がある。そのためにも、日常的に「子どもの成長を感じたこと、保護者のうれしい報告など、共に喜べることを見つけた時は、共有し」、また「(成長の過程として)一般的には普通と考えられるようなことでも、目の前の本人にとっては、辛いことかもしれないと含み、受け止めるよう意識」しているという。支援者は、日常的に保護者の抱く子育ての喜び・大変さに細やかに共感する関わりを積み重ねながら、信頼関係を構築するよう努めているのである。

さらに、「(支援者が)自分から話しかけていくことも大事だけど、手を空けて広場に居ることでお母さん自身に(話しかける)タイミングを計ってもらえる」とし、支援の主導を母親自身が取れる支援者の在り方について述べている。

思いを聴き取る 「お子さんの行動を放置していっぱい見えるように見えていても、お話をしていると実は悩んでおられて。(中略)なので、第一印象だけで決めないというか隠れている部分もお聴きできるように」しているという。実際に思いを聴くことにより、観察による理解が更新されることもあり、その更新に対応し、支援にもよりふさわしく変化があるという。

また、「原則だめな事も、すぐにNOと即答しないようにしています。(中略)それぞれの思いや事情がある。それをいったんお聴

きし(受け止め)、丁寧かつ柔軟な対応を心がけたい」と語る。受けられない要望が出されたとしても、即答での断りは避けているという。それは、その要望を求めた保護者の心情や背景をくみ取り、今後別の形での支援に繋げていこうとしているからであると考えられる。支援者は、言語的・非言語的なメッセージを総合して保護者の思いを丁寧に聴き取っている。

(3) 繋ぐ支援・繋がりが生まれる支援 ストーリーライン

＜帰宅時の会話＞も＜迎え入れ＞同様に重要である。新来者にも支援者との間に何らかの＜繋がり＞を感じてもらえるよう心掛ける。＜新来者の居心地への配慮＞から支援者が＜新来者と常連者との公平性＞を心がけることは必要である。しかし、保護者と支援者は日常の関わりの中で＜関係構築の過程＞を経ていくものであり＜一律公平な関係性はあり得ない＞とも考える。むしろ、＜常連保護者とスタッフの間関係性＞に＜新来保護者を繋ぐ支援＞に努めたい。実際に＜常連保護者＞が＜新来者＞へ働きかけていく姿も見られている。

また、＜ニーズに応えるため＞に、対応した支援者が確実に＜他のスタッフ＞、＜他の保護者＞に繋ぐ支援もある。しかし＜人と人との出会いが生まれる環境＞の中で＜保護者自身が自ら繋がる＞姿も見られていることや、＜出会う多様なスタッフとの関係性＞による支援の可能性も期待できる。これらのことから＜スタッフによる直接的な支援＞のみではなく＜多様な繋がりが生まれる環境による支援＞の可能性にも期待したいと考え

ている。

繋ぐ支援 「まだ（支援者とも）距離感を量っている状態の新来者が帰る時は、遊べましたか？と一言かけるようにしている。その関わりで次に繋がるか違ってくと思う。（中略）まだ小さいからここでは全然遊べないと思っ

ていらっしゃる場合も意識的に、またお待ちしていますと話しかけ、また来ようと思えるように」と、ほのかであっても支援者との繋がりを感じてもらうことによってこの親子を支援センターに繋ぐ支援をしている。

また、「保護者の不安が強そうな場合は、月曜日にある臨床心理士の子育て相談をご案内しています」と専門家の支援に繋げることもある。さらに、「ふさわしいスタッフに繋ぐことを心掛けています。最近、年度末なのでよくあるのが、保育園入園で不安な思いを語られる方がいらっしゃって、職場復帰したてのスタッフに紹介すると、リアルな話を聞くことができるっていうのは、お母さんにとって励ましになって、表情がパーと明るくなって、元気になられました」とあるように、保護者のニーズにマッチした情報や経験を持つスタッフに繋ぐこともある。また、「（支援者と）常連さんとで会話が弾んでいる時には、そこに新規の方を繋ぎ、より大きな輪ができる支援ができたらいいなと考えています」と語る。

繋がりが生まれる支援 「発達を心配していた保護者がいらした時、（スタッフが）お母さん同士を引き寄せなくとも、なんとなくもしかしたら同じような大変さを持つてるかもってお母さんが思った時に、ふと近づく。私達が意図的に引っ張らなくても、（中略）自然に、言葉で確認は取らなくても、何とな

くお母さん同士と一緒にいて、ご飯も一緒にという繋がりが見えたりする。（中略）それこそ、そういう時には常連さんの力がすごく素敵に発揮される時というか、（中略）常連さん達が新しい人や困ってる人をすごく助けてくれるということが見えるので、なんか、そういういろんな人がいる空間を作るっていうのもいいのかなと」

支援者であると使命感から支援者自身が行動を起こすべきと考えがちである。しかし、語りにあるように、保護者達は主体者として能動的に自分から求めたり助けたりという行動を起こしている。支援者の使命感による過度な支援が保護者自身が持つ自ら繋がっていく力の発揮を阻害することもありうると意識すべきであることを示唆している。

（4）子育て支援者としての自分

ストーリーライン

支援者らは、支援者はどうあるべきかという問いの答えを求め＜試行錯誤＞してきた。＜支援者として役立たねばとの気負い＞や＜保護者をどう支援するか＞＜子どもの課題をどう支援するか＞など＜保育者とは違う＞、＜子育て支援者＞という＜未知な役割＞に戸惑いつつも、＜振り返り＞や＜意見交換＞等、＜スタッフ間の学び＞の機会を持つことにより、問いに対する考えを深化させている。

また＜自分自身の経験の広がり＞による＜保護者観の更新＞がなされ、＜親子支援の在り方＞についての理解も深めている。

試行錯誤 「オープンから間もない時、自分自身がスタッフとして保護者との関わり方に

迷いがあった。(中略) どういう関わり方がいいのか、模索していた。言葉遣い、距離感、会話の頻度や内容…今思えば迷いながら対応していた」と語るように、試行錯誤を積み重ねの中で、「今は少しづつ迷いが減ってきた」という。

また、「自分が発する言葉がお母さんたちに不安を抱かせてしまうのではと思います、言葉を飲み込んでしまう状態になった」と、使命感から、支援が滞る事態も経験した。その事態は「お母さんの内面を理解しようとするあまりに、素朴に寄り添う以上のことをしようとして混乱していた状態」と振り返っている。

そして、「(他の) スタッフに(中略) 質問し続けていく中でいろんなことが見えてきた。(中略) 支援の中にすごく深い思いがあって、それを聞くことによって、自分が何か応用できていくヒントを得た」と語るように、試行錯誤を支援者間で分かち合うことによる学びがあるという。これらの語りから、支援者の資質の向上には、探求し続ける過程が重要であり、その過程にあってはチームで実践を振り返り学びあうことが有効であることが示唆された。

支援者自身の経験と支援 「私も一人の母としてできていないことがたくさんあり、いつも完璧にはいかず悩んだり落ち込んだりを繰り返している。そのような時に誰かに話を聞いてもらいたいと思うけど、完璧を求められるようなことを教えられると、すごく疲れてしまう。その気持ちが分かるので、相談されたら共感することを大切にしている。教えてしまうようなことはしないよう心掛けている。でもどうしても”先生”として勤めてきたこともあり、教えようとしてしまう自分があるのも正直なところ」と語るように、母親としての経験と、保育者であった経験の上で

支援者としてどうあるべきか葛藤を覚えている。

また、支援者自身も人生を歩みの中で、「私自身、出産前と出産後で(支援者としての関わりが)変わったなって思う」と語っている。元保育者としての経験の上に、支援者という立場となり、そこに「同世代の子どもを育てる仲間である母親という立場」が重なっていく中で、「共感的になれるからこそ伝えられることがあるかもしれない」とし、自分自身の変容が支援にプラスに働く可能性に期待を持っている。

また保育経験、子育て経験のない支援者は「自分に母親としての立場や、子育ての経験がないことから、子育て支援センターでできる仕事、役割はないのかもしれないと極初期は悲観していた」という。しかし振り返ってみると「その時は、支援は経験則からしか生まれないのではというような思い込みもあったので、悲観的になっていたのだと思います。日々親子と触れ合う中で自然とその状態から脱していきました」と語っている。

支援者も一人の人間として日々様々な経験を経て、変容し続ける存在である。そう考えると、子育て支援の現場は、人生の途上を歩む支援者と保護者が関わり合う中でダイナミックに展開されるものと言える。そしてその関わりを通し支援者も保護者もそして子どもたちも共に育ちあう場であると捉えることができる。子育て支援の現場は固定的なものではなく、そこに集う人によって創り上げられるものであるといえよう。

【総合考察】

本研究の目的は、大学が新規開設して2年半になる子育て支援センターで働く子育て支援者の実践に関する語りから、支援者が保護者をどう捉えているか、また、子育て支援者の専門性をどう考えているかに焦点をあて、

子育て支援センターにおける子育て支援者の専門性について探索することであった。前述の結果と考察から、明らかになったことを以下に示す。

(1) 子育て支援者が持つ二つの保護者イメージ

保護者をどの様に捉えるかは、支援の実際に影響する。今回の支援者の語りには、「支援すべき対象としての保護者イメージ」と「子育ての主体者としての保護者イメージ」といった二つのイメージがあった。

「支援すべき対象としての保護者」としては、「NOという印象を前面に出さないようにする」「所属感、居場所感を感じられるような支援を心がける」と言う語りにも表れているように保護者自身の存在を歓迎し、細やかに個別的な対応をすることで、継続利用を促し、持続的に支援しようと心を砕いていた。

「子育ての主体者としての保護者イメージ」としては、「どう今日この場で過ごしたいかはその日その人によって違うので、（保護者一人ひとりの）ニーズに添うようにしたい」と独自性を尊重したり、「利用者ルールを説明するときは、ルールに従ってもらうというよりは、ルールを知ることによってこの施設を快適に使うことができるメリットがある」といった伝え方ができるようにしています。」とするなど一方的にサービスを提供するのではなく、このコミュニティを共に形成する主体として保護者を捉える語りもみられた。また、支援者は、他の保護者と自ら繋がっていたり、自分からタイミングをつかんで支援者に声をかけ相談したりする行動の出現を待つ姿勢に徹する支援も試みている。日比野(2013)は、母親は厳しい子育て期の状況の甘んじる受動的な存在ではなく、自ら子育てネットワークを結んだり、子育て負担感の軽

減の工夫をしたりするなどの主体的な行動を起こす存在であること指摘している。このような保護者理解に基づいた支援は、保護者自身が本来持つ力、そして、親として育って行く力に信頼したものとなるであろう。

(2) 子育て支援センターにおける子育て支援者の専門性

今回の語りから、「受容する」「応答する」「聴く」「繋ぐ」「試行錯誤する」「共に育ちあう」という支援者の専門性が見出された。

「オープンから間もない時、自分自身がスタッフとして保護者との関わりに迷いがあった。言葉遣い、距離感、会話の頻度や内容等幼稚園の先生ベースの考え方、感じ方と支援の場での寄り添いとの中に相反する感覚があり模索していた。」という語りにあるように、スタッフは、子育て支援者とは何かという大きな問いの答えを親子の姿の中に見つけようと模索する日々を送り、その営みは続いている。

その中で、「ここではスタッフは保育者ではないので」、「支援の際に保育者として指導的立場であった経験が邪魔をする」など、「保育者」と「子育て支援者」を意識的に区別しようとしている。さらに「（保護者に）先生と呼ばれることに違和感がある。（中略）先生っぽいしぐさや行動パターン、言動や雰囲気っていうか、何かを知っている人、教えてくれるひとと思って保護者も接しているように感じる」と子育て支援者が保育者モデルによって行われることに対しては、強い違和感を持つ発言もある。

さらに、子どもの行動に対し何らかの課題を感じた際に、自分は「保育者ではなく、支援者であるから」と直接的に働きかけることに躊躇することもあったという。これらは、「保育」の知識技術の応用で「子育て支援」

が行えるだけでなく、「親子を支援」するという新たな専門性を探求していく必要性があることを示していると考えられる。

(3) 子育て支援センターにおける二つの支援モデル

今回の語りの分析から、二つの支援モデルが示された。

① 個別的な支援モデル

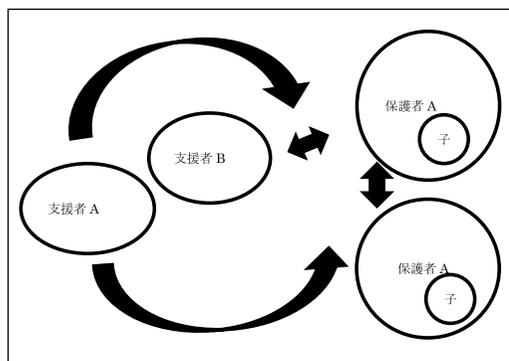


図1 個別的な支援モデル

この支援モデルのイメージを図1に示す。これは、保護者一人ひとりに寄り添う共感的な対応、情報提供をし、ニーズを把握し、それにあった支援を行うことをさす。よりふさわしい支援にするために、情報収集をし、ニーズに合致した支援を行おうとしていた。この支援モデルの場合、支援がふさわしく働いている場合には、保護者の満足度は高い。反面、合致しない場合は保護者満足度が低くなる可能性がある。また、子どもに何らかの課題を感じた際には、子どもへの直接的支援を躊躇し、その分、保護者の行動に目が向き、責任を果たすようにするために遠隔的に支援をしようとする意識が働く。その際、保護者に対する評価を下げるという傾向もみられた。今回の特に保育経験者の語りで、「親子の支援は難しい」としていたケースがこれにあてはまる。

② 環境による支援モデル

この支援モデルのイメージを図2に示す。これは、様々な人が共に集うという子育て支援センターの環境を活かし、そこで生まれる関係性を大切にしている支援の在り方である。そこに集う保護者、子どもたち、支援者それぞれをこのコミュニティを形成する主体として捉える。

こうした子育て支援の在り方は、保護者支援の視点からも有効であると考えられる。池本(2003)は、「子育てをする権利」について述べている。「子育てをする権利とは、一つには自分の子どもの成長を自分の目で確かめたいという期待、子どもとの関係をもっと深めたいという期待、子どもや地域との関わりを通じて親自身も想像力を得たいといった期待に応えるものであり、また自分の子どもの教育を通じて、将来の社会に影響を及ぼしていく、子育てを通じて社会をよりよく作りかえていく権利でもある」[池本, 2003: 78]と説明している。このように親が「子育てをする権利」を有する存在として捉えるという視点からも、保護者が一方的に支援される立場ではなく、コミュニティを形成する主体として尊重される事は有益であると考えられる。また、こうしたコミュニティとしての子育て支援センターの在り方は、「孤育て」に奮闘する保護者に「共同養育」の場を提供することにもなる。

草野ら(2013)は、乳幼児を育てる母親の近所づきあいの程度が、その地域で子育てしやすいという感覚に影響を及ぼしているとし、近所づきあいの程度は、密着度が高い繋がりよりもゆるやかな繋がり「ほどよい関係性」がより効果的であると述べている。子育て支援センターは、様々な地域から利用されるため、居住地域ではない場合も多い。しかし、この子育て支援センターが広義の地域社会(コ

コミュニティ）として機能することは、親子の育ちにとって有益であり、また地域社会作りに対する一つの提案となると考えられる。

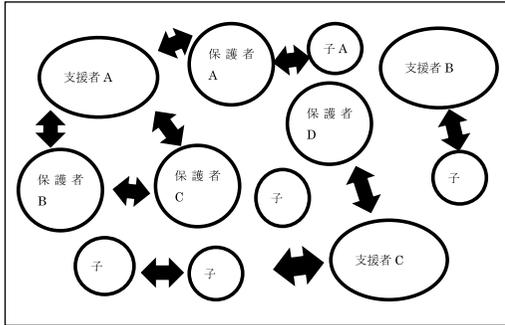


図2 環境による支援モデル

これら二つの支援モデルは、いずれか一方でよりよい支援を実現するとは言えない。親子に支援が有効に働くためには、ケースによって適宜どちらを選択する必要がある。また、その選択に際しては個人の判断にすべてを委ねることは避けるべきであると考えられる。支援者個人の子育て支援観、保護者観にも大きく左右されるからである。支援前の支援者チームでの協議や、事後の振り返りを通し、子育て支援センターとして、親子にふさわしい支援が展開されるよう、対話し続ける努力が必要である。

【本研究の問題点と今後の課題】

子育て支援者の専門性について探索してきた。今回の対象はひとつの子育て支援センターの支援者に限定した極一部の事例の報告に過ぎない。今後は、多様な現場で働く支援者に協力を願うとともに、経年的な支援者の意識の変容など様々な角度から、子育て支援者の専門性について探索を重ねたい。また、しばしば指摘されている「保育者」と「子育て支援者」の専門性の差異についても明らかにするとともに、双方の専門性が互いに作用し全体として子どもと保護者にとってふさわ

しい支援が展開できる社会づくりの一助となればと考える。

文献

- 五十嵐裕子（2008）子育てをめぐる状況・施策の変遷からみた保育士に期待される役割と養成についての一考察. 浦和論叢. 38
- 池本美香（2003）失われる子育ての時間-少子化社会脱出への道-. 勁草書房
- 池本美香（2014）親が参画する保育をつくる国際比較調査を踏まえて. 勁草書房
- 大谷尚（2007）4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案-着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き-. 名古屋大学大学院教育発達学究科紀要教育科学. 54（2）
- 大谷尚（2011）SCAT: Step for Coding and Theorization -明示的手続きで着手しやすく小規模データの適用可能な質的データ分析手法-. 感性工学. 10（3）
- 片山美香（2016）若手保育者が有する保護者支援の特徴に関する探索的研究-保育者養成校における教授内容の検討に生かすために-. 岡山大学教師教育開発センター紀要. 6（別冊）
- 草野恵美子・奥野ゆかり・佐藤文子・和木明日香・浅見恵梨子・上田恵子・吉田久美子（2013）乳幼児を育てる母親の「近所づきあいの程度」がその地域における「子育てのしやすさ感」に及ぼす影響. 大阪医科大学看護研究雑誌. 3
- 汐見和恵（2007）保育者の役割と保育者に求められる専門性-今求められている子育て・子育て支援のコンピテンシー-. 東京文化短期大学こども教育研究所紀要. 2
- 橋本真紀（2001）地域子育て支援センター職員の専門性に関する一考察-従来型の地域子育て支援センターにおける実践から-. 日本保育学会大会論文集. 54
- 日比野直子（2013）母親のライフコースにおける子育て-母親の語りによる子育て過程と支援-. 金城学院大学論集（人文科学編）. 9（2）
- 虫明敏子・西山修・高橋敏之（2015）幼稚園教育における人的つながりを支える親支援の方向性. 岡山大学教師教育開発センター紀要. 5（別冊）